

## 編集後記

二〇〇八年三月に『大衆文化』創刊準備号が刊行されてから十一年、七十名を越える皆様のご協力を得て、二〇一九年三月には第20号をお届けすることとなりました。それを記念して『セクター通信』では、『大衆文化』に論文をお寄せいただいた方々に「大衆文化と乱歩に関する本」のアンケートを取り、各人おすめの本を紹介していただきました。どうぞこちらも併せて御覧下さい。

さて、今回は五本の論文等を掲載致しました。南雲大悟氏の「豊子愷の「詩画」意識と「黒画」批判」では、中国の漫画の鼻祖と呼ばれた豊子愷の創作背景や、後年の文革時代に受けた作品批判について、また輪島裕介氏の「演歌は「演じる歌」か?——近代日本における大衆音楽と上演文化のミッシング・リンク」では、歌手を軸に明治・大正期と昭和期で異なる演歌（と呼ばれる大衆歌曲）の成立と差異について論じられています。海老澤彩香氏の「黒蜥蜴」の表象をめぐる——江戸川乱歩「黒蜥蜴」論——」では、身体・色彩・ジェンダーの各観点から黒い蜥蜴のいれずみの意味について、松本和也氏の「挿絵画家としての中村研一——「海燕」「女の一生」「春の行列」「花と兵隊」

では、新聞小説の挿絵の役割を画家自身がどの様に考え、実践していたのかについて分析されています。さらに米山大樹氏の「江戸川乱歩旧蔵『古版奇術書』同梱資料——山本慶一宛・乱歩発書簡控えを中心に——」では、自筆資料を用いて乱歩の奇術書の収集や研究について整理されています。絵あり、歌あり、手品ありとバラエティに富んだ内容となっており、「大衆文化」への理解も一段と深まるのではないのでしょうか。